

上徳不徳

コロナ禍が明らかにしたこと

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず 大石 久和



世界中がコロナで騒動しているが、そのなかでもコロナ禍で見せた日本の国家運営能力の喪失は先進国のなかで際だったものだった。人口あたりの医師数では、ドイツなどを下回っているが日本もそこそこ確保できているし、感染症病床は近年大幅に減少させてきたけれども、これも人口あたり病床数全体では世界水準を確保できている。

そしてEUやアメリカを遙かに下回る桁違いに少ないコロナの患者数なのに、日本では医療崩壊がうるさく叫ばれている。

医療費削減が財政負担を軽くするといった財政再建至上主義に冒された日本では、民間病院は常に満床近くの患者を抱えていないと経営が成り立たなくなっていて、危機に備えた余裕をなくしてしまった。

社会が持つべき余裕をすべて無駄として削ぎ落としてきたことが、この国の危機に対する耐性をきわめて脆弱なものにしてきたことが明らかとなったのだ。

病院や医師・看護師の機動的な運用もできないままにしてきたことが、この程度のコロナ患者数で崩壊を連呼しなければならない事態を生んでいる。きわめて少ない患者数しか受け入れていない病院が多いというのに病床不足を騒

いでいるのは実に奇妙な話である。

医師会長などが医療崩壊を叫んでいるが、病院や病床の弾力的な運用に責任を感じていないのだろうかと思議なのだ。なぜ、具体的な効率運用を提案できないのだろうか。

科学技術先進国であったはずなのに、自国でワクチンの開発もできず、またワクチン入手もきわめて遅い。最先進国クラブのG7で最後のワクチン接種国だし、OECD加盟37か国中でも最後から数番目という情けなさなのだ。

また韓国では、アストラゼネカのワクチンを自国生産できているのに、それもできない有様だ。一回分が無駄になるという注射器の話に至っては、悲しみのあまり涙が出そうになるくらいだった。

イギリスの世界的科学誌ネイチャーが「このような科学技術研究費の削減や研究者の処遇の改悪を続けていると、日本は科学技術大国から転落するぞ」と警告したのは2017年のことだったが、それはもう2021年には起こってしまったのだ。

そして、日本の最大の問題は、日本政治が「国家は最大にして最後の国民救済機関である」との世界が持つ理念を共有できていないことである。アメリカは、200兆円にもなる補正予算を

成立させ、バイデン大統領は3月6日その意義を強調する演説を行った。

その中には、3回目となる国民への直接給付を一人あたり15万円（ただし7万5千ドル以上の所得者には制限あり）規模で行うことも含まれている。1回だけの10万円の給付で終わりとし、後は生活保護に走れという国とは大きな違いである。

また、失業給付も充実され、議会審議で減額されたとはいえ、追加の給付額は週に300ドルとなり、期間も9月まで延長された。さらに、休業の続くレストラン・バーの救済のために、250億ドル（約2兆7千億円）を用意したというのだ。

コロンビア大学のジョゼフ・スティグリッツ教授は、「疫病・災害・気候変動などの危機から国民を守り、社会全体に奉仕するのは、本来政府です」と明確に述べているが、これを述べるができる経済学者がこの国にはほとんど皆無であることも、国民にとって大変不幸なことだと言わなければならない。

このアメリカの動きは、コロナ禍が単に疫病問題を越えて、1930年代の世界恐慌と並ぶ経済危機であるととらえ、それによる雇用の喪失、需要の消滅による大きな景気後退に備えようとしていることなのである。

アメリカ財務長官のイエレン氏は、「低所得者層により悪影響が及んでいる。迅速な行動が不可欠だ。すべての人が景気回復の恩恵を受けることを確実にすることが必要だ」と述べたし、バイデン大統領も「雇用創出へインフラ投資などが必要だ」としたうえで、今までの財政出動は「頭金で、単なる第一歩にすぎない」と言うのだ。

日本の財政出動は前回でもう打ち止めの姿勢とあまりに異なるし、国民への愛情という意味でも、日本政治はあまりにも冷淡だと言わなければならない。

各国の財政の健全性についての取り締まり役というべきIMFのゲオルギエワ専務理事も、2021年1月には「現在の政策に関して3月から各国政府に対して支出を促す。最大限にお金を使い、さらにもう一段歳出を増やすように求める」と述べているのだ。

このような動きを見ていると、日本の政治や政府は、コロナで国民生活や経済に何が起きているのかが理解できていないと感じざるを得ない。われわれの発想や思考の狭さについて、世界からの疎外感を拭えないのだ。

最近、筆者が上梓した「国土学が解き明かす日本の再興・・・紛争死史観と災害死史観の視点から」（海竜社刊）は、これらの事情について「全員があるルールに従うことで全員の死をまぬがれてきたし、たった一人がルールを守らなかったために全員が死亡した（殺害された）経験をしてきた人びと」と、紛争ではなく自然災害で死んでいったわれわれ日本人との違いに着目して論を進めたものである。是非一読をお勧めしたい。

コロナ禍を経験して、財政再建至上主義に冒されてきた日本の凋落も明らかになったし、世界の人びとと日本人との違いも明確になったとの感を深くしている。